

精神疾患をもつ親への子育て支援に関する研究 — 応援型支援モデルの構築と実践 —

看護学科 精神看護学領域 澤田 いずみ 教授



Q. どのような研究をされていますか？

A. 日本の精神疾患の患者数は2017年では419.3万人で、15年前と比較して約1.6倍に増加しています。統合失調症やうつ病、不安障害や適応障害を抱える子育て世代が精神科医療機関を訪れる機会も増加し、通院している人の15-45%が子育てしているとの報告もあります。精神疾患をもつ親は、自分の病気と付き合いながら子育てをしています。しかし、精神疾患は周囲から理解されにくく、孤立してしまい、子育てが困難になる場合があります。精神疾患を抱えながらその人らしい子育てができるような支援が求められています。私は、その方々はどのような支援を求め、精神科医療機関ができることは何かについて研究しています。

Q. これまでどのような研究をされてきましたか？

A. 当事者である親御さんと看護師・助産師・保健師を対象に行った面接調査の結果、親御さんたちは、子どもの成長を願い、自分の病気や内服が子どもに与える影響について悩んでいることが分かりました。そこで、統合失調症という疾患をもつ親御さんのため看護職のケアガイドを作成しました。他にも、新たな支援方法として、オーストラリアで開発されたPositive Parenting Program(前向き子育てプログラム：トリプルP)をメンタルクリニックの外来に導入し、その効果を評価しました。トリプルPは、精神科医療機関だけでなく大学をはじめ各地の子育て支援機関で実践し、すべての親御さんのメンタルヘルス問題の予防に関わる研究にも取り組みました。



看護職のためのケアガイド

Q. 将来の展望をお聞かせください。

A. ケアガイドやトリプルPは、不安の軽減や子育て技術の習得に一定の効果を示しましたが、個々が抱える問題は多様であり、特に孤立の問題は課題として残りました。そこで今は“応援”の研究をしています。長きに渡る子育てを支えるには医療機関だけでなく地域の人たちの応援が必要だからです。応援は、その人らしさの実現を願い、その人の味方になって蔭に日向に励まし、応援団という仲間を作ったりすることを通じて、自分らしさも充実していく過程だと考えています。精神疾患をもちながら子育てしている方々の努力と魅力を社会に発信し、応援団を増やしていく活動を“応援型支援モデル”と名付け、親御さんとその子ども達が、地域のいろいろな人たちと繋がっていきける仕組みづくりを研究します。医学部と作業療法学科の先生方と認知機能と子育て態度との関連に関わる研究も行っています。いろいろな分野の方たちと研究に取り組んでいきたいです。



トリプルP実践の様子

もう少し知りたい!と思った方はこちらへ

看護学科精神看護学領域 URL

➡ https://web.sapmed.ac.jp/hokegaku/ns/ns_seishin.html

・大学院保健医療学研究科看護学専攻精神看護学分野 URL

➡ https://web.sapmed.ac.jp/hokegaku/g_ns/g_ns_seishin.html